

蓄音機の発明

音の記録ができるようになったのは、それほど遠い昔ではありません。例えば、幕末の坂本竜馬(1836-1867)の写真は残っていますが、今、その声を聞くことができません。18世紀の音楽も楽譜で記録が残っていても、その当時の演奏家の演奏は聞くことができません。

これらの音声や音楽などの記録ができるようになったのは、1877年に米国のトーマス・アルバ・エジソン(1847-1931)が錫箔円筒式蓄音機を発明してからのことです。

蓄音機が一般家庭にも普及し始めたのは、20世紀に入ってエジソンが円筒式蓄音機を安価な「ホーム」や「スタンダード」のモデルとして大量生産してからです。

一方、エミール・ベルリナー(1851-1929)が1887年に米国で特許を申請したのは円筒式ではなく円盤に横振動で録音する方式でした。この蓄音機が後に多くの人々によって改良が重ねられ「ビクター」などの名前で普及していきました。

1. 円筒式蓄音機

1900年頃からエジソンが一般家庭にも普及させるため円筒式蓄音機を大量生産しましたが、性能、堅牢性、耐久性など、品質は当時の技術の最高のものでした。日本では「島津製作所」などが輸入販売していたようです。

2. 円盤式蓄音機

円盤レコードは円筒レコードにくらべて取扱いやすく、大量生産にも適していたため、蓄音機と共に急速に普及しました。日本でも1910年頃から「日本蓄音機」など多くの会社が蓄音機を生産しましたが、1948年頃からLP盤がSP盤に取って代わっていきました。

エジソンの円筒レコードは複製が困難ですが、ベルリナーの円盤レコードは素材に常温では硬く熱を加えると柔らかくなる天然樹脂のシェラックを使い、プレスによる大量生産を考慮したものでした。また好みの音量を得るためレコード針の硬さや太さを変えて調整しています。

展示 及び レコード・コンサートで使用する蓄音機

1. 円盤式卓上蓄音機

名称 : ビクトローラ・VV-9型

メーカー : ビクター・トーキング・マシン社

生産年 : 1921年頃(大正10年)頃

生産国 : 米国

初期の型は1911年に発売され、その後何度かのマイナーチェンジがなされて本機に至りました。ビクター卓上型の代表的な機種です。

☆ これらの蓄音機は5月22日(木)のSPレコード・コンサートで使用しますので、SPレコードをお持ちの方は、是非お持ち込みの上おかけ下さい。



2. 円盤式ポータブル蓄音機

名称：ビバ - トーナル・コロムビア・グラフォノーラ・109A 型

メーカー：コロムビア社

生産年：1925 年(大正 14 年)頃

生産国：英国

前面にゼンマイのハンドルがあり、折りたたんで収納できるようになっています。ケースには鍵が付いています。



鑑賞する曲(予定) (解説はウキペディアを含むウェブサイトから抜粋)

1. 江利チエミ「テネシーワルツ」(1952 年発売)

江利チエミ(1937-1982)は、昭和期に活躍した日本の歌手・女優・タレントです。本名は久保智恵美(くぼ ちえみ)です。「テネシーワルツ」の大ヒットは「日本語と英語のチャンポン」というスタイルを用いたこともあり、それまで都市部中心でのブームであった「ジャズ」を全国区にする牽引役を果たしました。作曲はピー・ウィー・キングで、作詞はレッド・スチュワートですが、訳詩は和田壽三です。



2. 美空ひばり「私は街の子」(1950 年発売)

美空ひばり(1937-1989)は、昭和の歌謡界を代表する歌手・女優の 1 人で、横浜市出身です。女性として初の国民栄誉賞を受賞しました。本名は加藤和枝(かとう かずえ)です。「私は街の子」は、松竹映画「父恋し」の主題歌で、作詞は藤浦洸、作曲は上原げんと です。



3. モーツァルト「フィガロの結婚・序曲」

フィガロの結婚は、フランスの劇作家カロン・ド・ボーマルシェが 1784 年に書いた風刺的な戯曲で、ならびに同戯曲を題材にヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)が 1786 年に作曲したオペラ作品です。序曲は流麗かつ華麗な曲調で、現代ではモーツァルトの序曲の中で 1、2 を争うほどの人気があり、コンサートでは序曲単独で演奏されることも多いそうです。

4. ベートーベン 「交響曲第 6 番・田園」

交響曲第 6 番 へ長調は、ドイツ古典派の作曲家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が 1808 年に完成させた 6 番目の交響曲です。作曲者によって『田園』の標題が付けられています。

5. ヨハン・ストラウス 「皇帝円舞曲」

皇帝円舞曲は、ヨハン・シュトラウス 2 世(1825-1899)が 1889 年に作曲したウィーナワルツで、当初は『手に手をとって』という題名が付けられていましたが、ドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム 2 世がオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世を表敬訪問した折に、「両皇帝の友情の象徴」として、現在の呼び名に改められました。ヨハン・シュトラウス 2 世の晩年のワルツの中では、最も人気のある楽曲と認められています。静かな行進曲による導入部に始まり、ワルツ本体が導かれるにつれ、雰囲気はつねに勝ち誇ったような調子を帯びていきます。